

第 27 回 北海道建築賞・北海道建築奨励賞 審査経緯

本年度の審査の対象作品は、応募作品が 7 点、建築作品発表会発表作品から 10 点、計 17 点とした。第 1 回審査会の中井 委員を除く全メンバー参加のもとで開催され、昨年の委員会の経緯・審査の視点について意見交換を行い、今年度の審査方針を確認した。その後、書類選考によって審査が開始され、審査委員の推挙作品と推挙の理由に関する討論を経て、現地審査の対象とすべき候補を 7 点に絞り込んだ。

応募作品からは、遠友学舎（小林研究室+アトリエアク）／、作品発表会からは、奥尻町津波館（アトリエブク）／標茶町虹別オートキャンプ場（アープ建築研究所）／矩形の森（五十嵐淳建築設計）／道立ゆめの森公園（ブク・環境設計・今井設計共同企業体）／一（かね）（ナカヤマ・アーキテツ）／札幌 ドーム（原広司+アトリエ・ファイ建築研究所、アトリエブク特定共同企業体）／の 7 点であり、北海道建築の新たな地平を予兆させる建築作品も含まれていたが、建築としての意味や役割は多様であった。デザイン習作として捉えるべき建築、作品の建築、地域コミュニティの基盤や資産としての建築、地域社会の商品としての建築などである。しかし、今年度の建築賞委員会でも、これまでの選考の視点を崩さずに、「計画理論や設計・デザイン」に対しての「新しい挑戦・問題意識」、新しい人間・生活・環境の構築への意欲とビジョンに対する「ラディカルな追求」、加え、それらの「社会性」と「規範性」、を建築学会が優先させるべき価値とし、「新鮮、ラディカル、そして洗練への努力」を共通価値として、北海道建築賞の選考と審査を進めること、また候補作品は全て複数の委員が現地審査を行うという原則も了承され、審査が開始された。その後、全ての候補作品の現地審査完了を確認し、最終選考の委員会を開催した。それぞれの建築について、建築作品の特徴と評価すべき内容、設計や計画のプログラムとコンセプト、デザイン性を支えている論理性の今日的な意味などについての議論が展開された。単なる機能性や空間性や形態などの表層的な意匠や造形にとどまらず、それらを生み出した建築家の視座、プログラムや方法論、そしてその完成度や社会性などをめぐる意見が長時間にわたって交換され、委員の情緒や感性、そして建築的面白さや好みに基づいた曖昧な議論ではなかったことを報告しておく。

「遠友学舎」は、新渡戸稲造らによる「遠友夜学校」の精神を受け継いだ大学の集会施設であり、その計画とデザインの質とそのプログラム性、空間性と構造的合理性の合理、加えて周辺の歴史的・自然的環境との共生への姿勢と北海道建築の原型を探ろうとする姿勢について高く評価できるという共通の見解となった。「奥尻津波館」は、不幸な災害のメモリアルとしての役割

を求められた建築であるが為、建築の自己性を強く意識しており、内部空間構成や展示の饒舌さに比して、広大な自然環境（災害現場である海）との対話や周辺や人間を広く包み込む環境デザイン的な配慮には課題を残しているという共通の評価となった。「標茶町虹 別オートキャンプ場」は、自然環境の保全と風景に馴染んだ静かな佇まいの形成を目指した群建築であるが、個別の建築においても求められるべき空間性や構成論については新たな挑戦と洗練への姿勢が欠けているという共通の評価となった。「矩形の森」は、若い建築家のライフスタイルを地域に普及しているローコストな建築資材を巧みに用いて、包み込んだ住まいであり、環境技術とリンクしたいわゆるこれまでの北海道的住宅にはない心地よい空間性と果敢な挑戦を評価したが、習作の域を出ていない物足りなさの存在が評価の分かれ目であった。「道立ゆめの森公園」は、利用圏域の広い道東コミュニティの拠点であり、その中の施設を審査の対象としたが、形態の特異性のみを強調する姿勢と判断は、地域の風景論から、加えて公共建築であるがゆえのコストとベネフィットからも問題を含んでいるという共通の評価となった。「一（かね）」は急峻な斜面と風景の特性を読み取り、プライマリー建築を指向しつつ、環境への同化を試みた住宅であり、北海道型住宅の新しい原点探しといえる試みは評価出来るが、プライマリー建築にこそ求められる構造計画と形態化、そして空間性との洗練された合理性については多くの疑問が残った作品であった。「札幌ドーム」は、ドームという巨大建築ゆえに希求されるべき風景と建築形態の相克、構造計画と建築デザインの研ぎ澄まされた論理性と合理性、建築の計画性とデザイン性についての設計者の意思とそれを取巻く他者との闘いと協働との中から生まれてきた作品であり、近代建築の最も正統である構造と形態、そして素材の論理を正則に基づいて駆使しているとの評価を共有化した。

審査委員会では、選考の基準が「これからの北海道建築の地平を示唆しうる社会性と規範性」、加えて「合理と論理、ラディカル、そして洗練への努力」であることを再確認し、「遠友学舎」と「札幌ドーム」について、「卓越した建築力と建築理論そしてデザイン技術によって、完成度の高い建築作品としてまとめ上げているという」、評価にあたった委員一致の見解のもとで、北海道建築賞（本賞）にふさわしいという結論を得た。（なお、最終審査選考では、関係者である委員は退席し、審査を行っているのは言うまでもない）

文末ではありますが、今回の最終審査の直前に委員である中井仁実君がご逝去されましたが、これまでの審査における建築の明快な視点やデザインの洗練性についての鋭い眼差しを想いだしつつ、全員でご冥福をお祈りし、審査を継続したことを付け加えておきます。

（文責：北海道建築賞委員会・小林英嗣）

第 27 回 北海道建築賞

原 広司 君 「札幌ドーム」の設計

この建物の立地する環境は、ゆるやかな起伏をもつ札幌扇状地へ特徴が実感でき、風致地区の網がかかる広大な広がりの中に ありながら、国道沿いの喧騒とし、やや混乱した郊外市街地、そして閑静で古い計画的な住宅地が会う、特殊な状況下にある。しかも、札幌市の長期計画では高次都市機能拠点として位置づけられており、周辺の状況が大きく変容する可能性が極めて高い地区でもある。

この空間的そして時間的なクロスポイントに立地するこの建築からは、マクロスケールからメゾ、ミクロへと連続する風景性と空間性、素材感と知覚・身体感 覚、抑制されながら明快な主張を持つ象徴的形象とディテールにおける入念な論理性を強く感じる。また、これらを支える概念'clopen'は、建築そのものの構造性と空間性を紡ぐだけではなく、マクロからミクロへの環境性、土地の明快な歴史・履歴と予測困難な将来を時間的な意味でも繋ぎとめることが出来た広義の論理である。

モダニストとして（作者は嫌われるかもしれないが）正則としての理論性、正統的な空間構成論と構造論とに正面から向かい合っ取り組み、そしてオリジナルな建築言語にもとづいて、環境とクライアントが求める複雑で多様な要求を満たしつつ、かつ地域の特性や与えられた敷地形状や微気候などの固有の環境に誠 実かつ提案的に対応した、高次の作品である。正則の近代建築理論そして高度のエンジニアリングに基づいた洗練され完成度の高い建築が、20世紀末から21世紀の初頭にかけて、北海道の公共建築において結実したことは、技術性能主義や物理環境主義と、地域性・風土性なる免罪符的な概念に依存してきたこれまでの北海道建築の状況（公的クライアントと設計者の閉塞的でマンネリ的な関係）を深くそして自省的に考えるならば、非常に意味深い内容と背景を見てとることが出来る。

「新鮮、ラディカルそして洗練」へのメッセージを強烈に発信する作者の姿勢と意思は魅力的である。言語でのみ建築を語り、かすかな記憶のみを頼りながら 郷愁と地域性を嘗め回すような建築言語に固執する北海道的？建築論のみが跋扈するマンネリ風潮の中で、モダニズムの正道を歩みつつ、'関係としての建築'から離陸し、21世紀のホリスティックな'環境としての建築'を支えるべき建築理論の地平を希求しようとする作者の姿勢は意味深い。

バブル期とそれ以降、着膨れた変則的近代建築と地域・風土依存への表層的な志向性（ブランド化？）の蔓延とクライアントと設計者のぬるま湯的な関係によって生まれた建築によって、

北海道の風景と街並みは崩壊した。建築設計者の責任は大きい。

この作品は、20世紀初頭に確立されたヒューマニズムとエンジニアに基づいた建築理論の成果を再確認し、改めて仕切り直しを行いつつ、美しい北の国の姿の再生を求めつるべき現在、ふさわしい作品であり、作者の哲学である。

(文責：小林英嗣)

第27回 北海道建築賞

小篠 隆生 君 渡邊 広明 君 「遠友学舎」の設計

遠友学舎は、広い北大構内の北端、第2農場のバーン建築の傍らに、楚々とした姿で佇んでいる。背面には密集した住宅地が押し寄せて、雑然とした都市風景が存在しているのであるが、それらを隠すように切妻の大屋根が、東西軸上に伸び、北大構内側から見ると、スケール感のある大屋根の平面が水平に展開し、バーン建築と共に、緑苑のエッジにふさわしい景観を形成している。明治初頭（途中移築されているが）に建てられたバーン建築と、世紀を隔てて建てられたこの遠友学舎との呼応の仕方は、二つの建築とも、風土に対する素形への希求という、共通の根を持つことによって妙なるものへとなっている。

大屋根の架構が、バーン建築ではバルーンフレーム（後世トラスで補強してあるが）架構によるのに対して、遠友学舎では、集成材の大梁と張弦による架構で形成されている。設計与件としては、特定のプログラムが与えられなかったと聞くと、多様なプログラムを吸収すべき、ユニヴァーサルスペースへの造形に、この始原への遡行ともいべきざっくりとした切妻の単純な架構と形態を提示した、作者の大胆さと同時に謹み深さに深く敬意を表したい。

内部の軽快な可動間仕切のスキルや、的を得た素材の選択によってもたされる、柔らかで、親密感のある空間を評価することは敢えて避けたい。それを評価することは、この建築の提示された意味を矮小化する恐れがある。

現代の建築技術は、多様な表現形態を可能にする。その中で、風土における素形というべきものを再度見詰め直し、一方で、様々な現代での環境技術の先端への試みを凝縮させようとした、作者の狙いが、この建築を実在のスケール以上に大きなスケールをもつ存在としていることを高く評価するものである。

（文責：後藤達也）